

ダンジョンにリーパー  
がいるのは間違ってい  
るだろうか

ほっか飯倉

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ダンまちの世界に転生した主人公が力を求めてオラリオに向かう。そんな話。作者がヒマな時にしてた妄想を書き起こしたもの。

見切り発車です。

# 目次

プロローグ | 1

一話 リーパー、オラリオに立つ

9

二話 初陣 | 22



# プロローグ

ある日目覚めたら知らない天井だった。

そんな最近流行りの転生モノのラノベの導入みたいなセリフを言うことがあるだなんて思いも

しなかった。

実際、あの時はそんな手垢でべたべたな感想しか思い付きやしなかったし、まさか本当に転生していたなんてそれこそ考えてもいなかったのだけど…。

どうやら、俺は異世界転生というやつを経験したらしい。

さて、なぜ異世界転生などという眉唾なものだと気づいたかというと、赤ん坊なのに「前世」の

自分の記憶があったとか、服やら建物やらが異国情緒溢れるものだったとかだけの理

由じゃない。

ある日、狩りから帰ってきた（らしい。両親と兄がそんな話をしていた）父さんが背負っていたものが、

すげーでっかい鎌だったからだ。

さすがにそんなものを狩りに使うのは地球ではあり得ないって。

閑話休題。

そんなこんなで年月が過ぎ、俺が読み書きを覚えるために読んだ絵本が、俺の人生を変えたのだ。

その内容は、良くある英雄譚。ただの農民の息子が、剣を取り、仲間を集め、強くなり、そして

悪のドラゴンを倒して財宝と名誉を得る、そんな話。

…正直、憧れた。あんな風に強くなりたい、って。

もともとその手の話は大好きで、前世でも勇者とか英雄とかになりたいと思ったこと

はあったのだけど、所詮は凡人だった俺はそうそうに何か「特別」な人間になりたいという夢を諦めた。

だけど、この世界なら。大鎌もって狩りに出かけるような世界なら。

そう思った俺は、父さんに話してみることにした。

「あのさあ、父さん」

「何だ？何か分からないところがあったのか」

「もう少し大きくなったらでいいからさ、俺にあの鎌の使い方を教えて欲しいんだ」

「それはそのつもりだったが……つまり、お前はその本の主人公のようになりたいということだな。……本気か？」

バレテラ。まあ、本を読んでいる時にこんなこと言い出したらそう思うか。

「うん、本気だよ。英雄みたいにはなれないかもしれないけど、それでも強くなりたいたいだ！」

「……………そうか。なら、十三歳だ。十三歳になったら教えてやる。戦い方も、身体の鍛え方も、全部。」

「ホントに？やった、ありがとうッ！」

大鎌の扱いは教えてくれる予定だったみたいだけど、それにしてもこんなにあっさり許可がもらえろとは思わなかったな。十三歳が楽しみだ。

数年後、十三歳になった俺は、父さんに様々なことを教わった。体力づくりのやり方、大鎌の扱い、戦いのいろは、他にもたくさん。それらの多くを身につけられた俺は、十五歳のある夜、父さんにこんなことを聞かれた。

「お前は、英雄のように強くなりたいと言っていたな。今もそう思っているのか？」  
「えっ？もちろん。言っただろ、本気だって」

「昨日、母さんと相談してみたんだがな。迷宮都市に行つて、冒険者になつてみないか？そこなら、神の”恩恵”を受けることでヒトの限界を超えた力を手にすることもできる。他にも方法はあるが…」

迷宮都市、か。…うん？ふあるな？



「もしかして、その都市の名前、オラリオっていうんじゃない？」  
「良く知ってるな。本にでも書いてあったか？」

父さんの言葉にうなずきながら（もちろん嘘）、俺は考えた。

「迷宮都市オラリオで”恩恵”で冒険者だつて？もしかしなくてもここは「ダンまち」の世界なのか？」

「——」ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか。ただの一般人だった主人公が、育ての親である祖父の言葉を胸にダンジョンのある街で冒険者として生活する、といった内容のラノベであり、その舞台となる街の名前が「オラリオ」というのだ。そして、そこでは神の血によって”恩恵”なるものを受けらることで、超人的な力を発揮することができるようになる。

いや、異世界だなあとは思っていたけど、まさかラノベの世界に生まれたとは思わなかった。でも、これはとても都合がいい気がする。時代にもよるけど、主人公くんと同じファミリア（俗にいうクランみたいなもの）に加入すれば強くなるための試練があるということがわかってるし、何より前世の俺はこの作品が好きだったんだ。原作の

シーンを間近に見てみたいという欲もある。

つまり、

「是非とも行かせてくださいッ！」

「命の危険があるぞ。わかっているな。」

もちろんだ。そういう思いを込めて、しっかりと目をみてうなずく。

「…実は、父さんたちはオラリオで冒険者をしていたんだ。結婚するために辞めてきたがな。お前の兄さんが産まれる前だから、もうだいたい昔の話になるのか」

「えっ、そうだったの!? 初耳なんだけど」

「聞かれなかったからな」

そんなお約束な返しをされるとは…。いやそんなことはどうでもいいのだ。早く家に帰って準備しなくては。

その旨を告げて家に急ぐ俺を、父さんが懐かしむようにみていたことにはまったく気付かなかった。

数日後、しつかり旅支度をととのえた俺は、家の出口で家族に見送られていた。

「向こうでもしつかり頑張んなさいね」

「家のことは僕と父さんに任せてよ」

「強くなるんだぞ。そのためには、自分以外の”強くなれる理由”というやつを探すんだ。俺のそれは母さんだった。…いってこい！」

母さん、兄さん、父さん。俺は、この家族のことを絶対に忘れないだろう。

「俺、向こうに着いたら手紙を書くよ。俺を育ててくれたこと、感謝してる。…行つてきます！」

ああ、もしかしたらこれが最後の会話かもしれない。

そう思うと、なんだか涙が出てきそうだ。ここまで感謝したことは、前世ではなかった。これは俺が目的をはつきりもって生きているからなのだろうか？

そんなことを考えながら、最寄りの馬車の乗り場へ歩く。…そう、きっとここから始まるのだ。俺の「英雄譚」が。

# 一話 リーパー、オラリオに立つ

さて、あれから特に何事もなくオラリオに到着した訳だが、どうしようか。

俺の記憶が正しければ、ヘステイア様は屋台でバイトしていたはずだ。来たばかりで地理なんか分からないが、大通りにあるだろう、多分。それならこの通りをまっすぐ歩いていってみようか。

……なんて考えながら歩いて、歩いて、歩いて、屋台を探して――

——いねえ！いねえじゃんどこにも！くそう、まだニートしてんのかあの神！……まあいいや、別にヘステイア様とこじやなきやいかんわけでもないし、ギルドに行つて入れそうなファミリア聞いてくればいいけど……なんか悔しいなあ……

---

ギルドの職員さん（ヒューマンの男だった）におすすめのファミリアを聞いてみたところ、いくつかのファミリアの名前と拠点の場所を教えてもらった。もちろん加入すべきは積極的にダンジョンに潜って活動する探索系ファミリアなのだが、大手のファミリアに入るのなんか恥ずかしいし、つまり最適解は中堅どころかそこその規模、または小さめのファミリアとなる。つまり大手は緊張する。まあ最悪えり好みしてられないけど、最初に行ってみるファミリアはこの目標に従ってもいいだろう。

というわけで、やってきました小さめの規模のファミリアの中で一番拠点が近かったファミリア、《カイロス・ファミリア》。

「たのもーっ、こちらのファミリアに入団したいんですけどー」

「……やあどうも、君は入団希望かな？」

いやこれじゃ道場破りか？とか考えていたが、応対しに出てきた人物の顔……というか髪型を見たときそんな思考は幾星霜のあなたにすっ飛んでいった。いや、顔はすんごい美形なんだけど。

「こうして扉をたたいてくれた以上、君を歓迎するよ。もし迷っているのなら、ぜひここ

にした方がいいだろう。なぜって、チャンスの神様には、この通り前髪しかないからね  
！」

「この神様かよ、この人、もといこの神。じゃなくて、そうなのだ。この神物の髪型、  
すごい長い前髪以外は全く髪が生えていないのだ。」

まあ、神様の髪型でファミリアを選びたいわけじゃないし、それにチャンスの神だっ  
ていうのならなんかあやかれそうだし。そんなことないです。

「入団させてもらえるならぜひしたいんですけど、面接とかしなくていいんですか？」  
「君からそれを言うのか……。試験がない理由かい？ そんなの、私のカンさ！ 私のカン  
が君は問題ないと言っている、それだけさ」

それでいいのか神様。確か神は下界で神の力アルカナムは使えなかったのでは？

まあ入れてもらえるならいいけど。というか、毎回このノリで入団許可してんのか  
な。それならもうちよい人がいてもいいと思うんだけど……確か4、5人くらいしか登  
録されてなかったよな？

「一つ聞きたいことがあるんですけど、いつもそんな感じで許可してるんですか？」  
「いや、そんなことないよ。ただ、私のカンがピンときた子しか入れてないだけで」  
「だからファミリアの人数が割と少ないんですね、納得しましたよ」  
「それもあって、うちの子たちはみな優秀な者ばかり。私の冴え渡るカンが自分でも恐ろしいくらいだよ、ナハハハハ！」

自画自賛かよ……でも、自画自賛するほどの基準に合格したんだから、俺も期待していいのかな？

いや、油断しちやダメだ。努力しないと成長しないのは当然のこと。才能があるうがあるまいが、それは変わらないはず。

ともかく、ここに入ろうと思う。そして、このファミリアで強くなるんだ。とりあえず、当面の目標は父さんを目指して頑張ろう！

「決めてくれたかい？」

「はい。このファミリアに入れてください」

「よし、歓迎しよう！君はたった今からカイロス・ファミリアの一員だ！……そういえば、君の名前は？」



「名前ですか？俺の名前はアイザック、アイザック・ハーケンです」

拠点内には誰もおらず閑散としていたが、内装はしつかりしていて居心地はすごく良さそうだった。誰もいないのは、おそらく全員ダンジョンに潜っているからだろう。もうすぐ夕方になるくらいの時間だから、そろそろ帰ってきてもおかしくないけど。さすがにそれぞれの個室は無いようだったが、それはまあしょうがないか。ある方が珍しいだろう。

カイロス様の部屋に入ると、彼は恩恵を与えるための準備を始めた。

「服を脱いでその台に座ってくれ。……………さてと、始めるよ」

言われたように服を脱ぎ台に座ると、カイロス様が背後に立ったのがわかった。そして、なにか温かいもの——多分彼の指——が背中に触れたとき、背中の方で柔らかな光がはじけた。ああ、これで俺も名実ともにこの神の子となったんだなあ……………楽しみだ

よ、自分のステイタスってやつを見るのが。

「うん？これは……………なんてこった」

ええ、なんか不安になるようなこと呟いてるんだけど。なんか問題があったのかよ……………。そう思つて尋ねると、彼はやりづらそうにステイタスを記した羊皮紙を渡してきた。

「あの、なんか問題でもあったんですか？」

「いや、問題というか、なんと言うか……………まずこれを見てくれよ、君のステイタスだ」

---

アイザック・ハーケン

L v. 1

力：I 0

耐久：I 0

器用：I 0

敏捷：10

魔力：10

《魔法》

二

《スキル》

アブソルブ・ソウル

【魂寄吸収】

- ・ 早熟する。
  - ・ Lvが上がるほど効果上昇
  - ・ 敵と遭遇する確率上昇
- 

これは……………成長促進スキル!?なんか嫌な予感がするう…………。  
しかもなんか厄い文面も見えるし…………。

「最初からスキルが発現してるだけで珍しいのに、成長を促進させるスキルなんてのは聞いたことがない。だから、このことがほかの神に知られたら、君は面倒に巻き込まれ

と思う。特によその子どもたちのことをあまり尊重しないタイプのやつらにはね」

「そうですか……じゃあどうするんです？黙っておくんですか？」

「そうだね、このことは他言無用にしよう。子どもたちを信用しない訳じゃないけど、どっから漏れるかわかったものじゃないからね。ただ、この敵と遭遇しやすくなる効果は周知しておこうか」

確かに。その効果を教えないままいつもの感覚で探索すれば、危険な状況になつてしまふかもしれないし、そうしたほうがいいな。いやでも、具体的なアビリティを教えないうちにしても、俺が明らかに早く強くなつていけば怪しまれるんじゃないかな？

うーん、こればかりはなつてからじゃないとわかんないなあ……まだあつたこともない人たちのことだし、今から気にしてもしょうがないかな。

「そういえば、先輩方ってどんな方々なんですか？」

「うちの子たちかい？そろそろ戻つてくると思うから、その時に紹介しようか……つと、そんなこと言つてるうちに戻つてきたみたいだ」

「たつだいまあゝツ、我輩、帰還ツ」

「あのねりズ、うるさいわよ毎度毎度」

「いいではないかクリス、我輩の熱い情熱を表現するにはだなー」

「だからそれがー」

「まあまあ、クリス落ち着いてよ。姉さんも声量抑えて」

うつわ、予想の数倍個性的な人きたあ……。

拠点に入ってきたのは茶髪のエルフの女性と緑髪キャットビープルの猫 人の男女だった。エルフの方はローブに杖とわかりやすい魔術師の格好をしていて、猫人の女性は軽装に弓、男性の方は盾と剣を背負っている。

3人ともこちらに気づいてる様子はないけど、こちらから声をかけるべきなんだろうか？

と悩んでる間に、先に神様がクリスと呼ばれていたエルフに声をかけてしまった。

「お帰り3人も。クリス、団長はどうしたんだい？」

「ただいま戻りました、神カイロス。団長は換金の為にギルドによってから来ます。

……それで、その方は？」

「この子はだね、先程入団することになったんだよ」

「どうもはじめまして、アイザック・ハーケンといいます。よろしく願います」

などと、居間に移動しながら自己紹介を始める。さて、どんな反応が返ってくるのか怖いな……。さっきの口げんかが素だったらやだな……。

「ええ、こちらこそはじめまして、クリステイ・ニアックよ。というか、あたし達に対して丁寧な喋らなくていいわよ、あたしもそうする」

「む、新人か？我輩の名前はリズ・アード。それから」

「ボクはルシアン・アード。リズ姉さんの弟なんだ」

「あとはもう一人団長がいるんだけど……そろそろ帰ってくる頃だと思うわ」

団長かあ、こんな人たちを束ねるんだから、すごい統率力のある人なんだろうなあ。

と、そんなとき、玄關のドアが開く音がした。これは多分、件の団長が帰ってきたのだろう。タイミングいいな、なんか。

「さつきからなんかタイミングいいですね」

「なあに、これこそが私の神の力のさ！」

「運がいいだけよ。神の力は下界では使えなくなるはずだし」  
「ウツ、おっしゃるとおり……」

ええ、そうなのかよ。一瞬期待して損したわ。じゃあさっきのカンってやつもほんとはただのカン？

「あなたはいつもいつもそうやって——」

「そんなことより、団長にあいさつしに行つたほうがいいと思うよ？ アイザックくん」

ルシアンさんの言うとおりだ。個人的にどんな人か気になるのもあるけど、向こうもあいさつに来られたほうが印象いいだろうし。そう思い、ちやうど居間に顔を出した人物に話しかける。

「どうも、今日からお世話になります、アイザックといいます！」

「おう、よろしくな。オレはアシユレイ・バイオネット。このファミアリアの団長をやつてる」

団長は青髪のヒューマンだった。筋骨隆々という雰囲気ではないが、なんとなく頼りになる感じがする人だ。

これで全員にあいさつしたということになるのかな？俺はどこまで強くなれるのだろうか？それはすべて明日からの行動にかかっているのだ。そして、明日からの行動のためにはまずやるべきことは――

「じゃあ、あいさつ終わったんで、冒険者登録してきますね！」

「そういえば、ついでに手紙書くのにこのペン借りてもいいですか？」

そう聞いてきたのは、先程冒険者登録してきた少年だった。

その紫の長髪で中性的な顔をした華奢な少年は、どこまで強くなれるか試しにこのオ



ラリオに來たのだという。

一応参加しているファミリアは新規のものではないらしく先輩からいろいろ学んでいきたいと言っていたが、少々心配である。こうやって話を聞いたのもなにかの縁ということで、この少年の担当をやろうか？

ギルド職員 ガウン・エヴァンズ（34）は、そう決めながらペンを貸し出すのだった。

## 二話 初陣

俺が習得した鎌の技は、基本的には刃で切り裂く、もしくは峰でド突く動きを組み合わせたものだ。父さんなんかはこれだけで大鎌のリーチを半径にした球形の攻撃圏<sup>アタックレンジ</sup>を持つていたし、俺自身も前面の半球くらいならなんとかなる。

なぜこんなことを考えているのか？それは――

「ッ、セエイッ！」

ゴブリンの集団と戦っているからだ。……一人で。

事の始まりは、一対一の状況でゴブリンを瞬殺してしまったことだ……と思う。あれから、ギルド職員の講習なるものを受け、ダンジョンに潜る許可を得たので、先輩方とともに向かい、そこでまず俺がどれだけやれるかという話になったのだが、一応、俺もある程度の訓練をしてきたので、ゴブリン一匹くらいならなんとかなってしまうのだ。

そのことについて聞かれたので正直に答えたところ、

「じゃあオレが引つ張つてくるから、複数相手にどんだけやれるか教えてくれよ」

……となつたのだ。

そこで団長がトレインしてきた二体だけなら良かったけど、俺のスキル——「魂寄吸収」——のエンカウント率上昇効果が発動しやがったのか、さらに追加で二体が現れたのだ。しかも先輩らは「危なくなつたら援護する」と言うばかりで助けてくれないし……。

そんな訳で計四体のゴブリンどもと戦うことになつたのだが、一体だけなら楽勝でも流石に四体相手では厳しいものがあるかもしれない。一応、遠くの方から弓で狙っているのがさつきチラツと見えたけど、たぶんほんとにギリギリまで助けてくれないだろう。

「ハアツ、くらえ！」

父さんに教わつた通り、できるだけ背後を取られないように立ち回り、一匹ずつ滅ら

していく。先程一体倒したとき恩恵で強化されたこの身体なら一撃で叩き斬れることは確認済みだ。しつかりと間合いを取って、突っ込んで来たやつの首を刈り、そして味方が殺られて動揺しているやつを胸を薙ぐ。続けてその隣のやつを貫き、引き戻すついでに飛びかかってくるやつを峰で押しつける。よし、これでトドメ……!?

最後の一匹の首を叩き落としたところで、後ろから壁が崩れる音……つまり、モンスターの生まれる音が聞こえてくる。

ヤ、ヤバい！慌てて振り向きながら後ろに飛びのき、構える。……が、たった今生まれ落ちようとしていたゴブリンは、壁から出てくる前に矢で頭をブチ抜かれ、魔石を残して消滅した。さつと振り向くと、リズ先輩が残心をしていた。いやつよ！というか上手いぞ、リズ先輩。ゆっくりとはいえ動いてる的相手にヘッドショットとか……。

「おおい、見たか、新人！我輩の弓の腕前を！」

「ちよつと、アイザックくんに当たったらどーすんのよ！」

「我輩が誤射したことがあったか？」

「これまではそうだけど——」

なにやら言い合っている二人を尻目に団長がにこやかに笑いながら話しかけて

くる。

「おい、一体瞬殺したからそんなに心配してなかったが、思ったよりやるじゃねえか！」

いやあ、先輩から褒められるってのはいいなあ。昔はそもそも先輩に話しかけられるってことがなかったからな……。

そういうえば、どうして俺はいつまでも前世むかしのことを覚えているのだろうか？

「大丈夫か？なんか急に考え込んだが」

「……いや、なんでもないツス」

「そうか？まあ、本人がそういうならいいけどよ。……よし、向こうも落ち着いたみてえだな」

団長の言うとおりに、リズ先輩とクリス先輩の言い合いはルシアン先輩がうまく仲裁してくれたみたいだ。ダンジョンのなかで言い合いなんてしてもいいのかと思っただけど、先輩程になると第一階層のゴブリンなんぞ油断しててもどうとでもなるのだから。

「しっかし、恩恵ってやつは凄いですねえ、まだ経験なんて積んでないのにかなり強くなってますよ、俺」

「まあ、お前の場合は元の技術がある程度しっかりしてたから経験値ゼロでもあんだけ上手くいっただと思っただけ……。うし、新人の実力も見れたことだし、今度はオレ達の実力ってもんを見せてやるとするかあ！」

団長はそう言って、腰の二刀を叩いた。彼の得物は小剣二刀であり、それらを巧みに使って遊撃をこなすらしい。先輩方のレベルは全員2なのだと昨晚聞いたが、位階を上げた者の強さはどれほどのものになるのだろう。これから俺が目指し、そして越えていくべき壁であるのだ。それをより早く感じれるなら、それに越したことはないだろう。

第一階層のモンスターでは流石に弱すぎるということで、やってきました第六階層。本来は中層十三階層以降、二十三階層までの攻略を進めているのだが、俺という新人――

—早い話が足手まとい——がいる状況で、万が一があってもなんとかなると判断されたのがこの階層らしい。完全に戦闘から離脱しているなら話は別らしいけど。

「まあ、この程度の階層の敵なら楽勝だしね」

とは、クリス先輩の言であるが……。確かに先輩方はここまで俺では勝てないようなモンスター相手に鎧袖一触といった戦いぶりだったし、やはり、まだまだ俺って弱いんだなあ。これからは一人で来るべきか……。先輩方と一緒にだと、いくら成長促進スキルがあるといってもなかなか経験が積めないだろうし、彼らの邪魔にもならないだろうし。サポーターって手もあるけど……。

そんなことを考えているうちに、数体のモンスターが生まれ落ちてくる。確かアレは「新米殺し」と呼ばれるウォーシャドウだったか、そいつが五体、あとはフロッグ・シューターがいくらか。正直習った通りなら俺が四人いてもかなりヤバイとしか思えないが、この先輩方なら楽勝なのだろう、マジで。

先輩方の布陣は、団長が先頭で遊撃、ルシアン先輩が次点で後衛の護衛、クリス先輩とリズ先輩が後衛でそれぞれ魔法、弓での攻撃である。今回もその役割をきっちり守り、まさに瞬殺、といった感じであった。

まず団長が姿勢を低くし、その二刀を広げるように構えながら最も近い敵——ウォーシヤドウに突撃する。そしてそのまま上体を起こしつ、その勢いでX字に斬り裂き、さらにその次の敵に斬りかかって行くのだ。もちろん、相手もやるた気のない兵士カカシではない。向こうもその爪で、またはその舌でこの冒険者を殺さんとしてくるが、そのすべてを躲していく。

その間、団長を無視してこちらを目標にしてくるモノもあつたが、それらはルシアン先輩が鉄壁の盾捌きで完全に捌ききり、後衛まで敵を通さない。また、遠くから攻撃してくるフロッグ・シューターに対してはリズ先輩の弓が唸り、前方の乱戦の隙間を射抜き、確実に数を減らしていく。

そして最後にクリス先輩の魔法だ。彼女の魔法の一つは炎の槍を飛ばすというもので、さらにスキルによつて魔法の規模を拡張できるのだという。

「【魔導拡張!】【我に眠る妖精の血よ、森人の名の元に励起せよ】【この身の魔力を灼熱と変え、槍と成して敵を滅せよ】——」

「——【フレイムランサー・エクステンション E!】——」

その炎槍は味方を避けながら残りの敵を焼き尽くし、このエンカウントを終わらせ



た。

すげえ……きれいだ……。

「どうだった、私達の力は？……聞いてる？」

「いや、正直見惚れてたよ。団長は最前線にいたのに全く被弾してなかったし、ルシアン先輩は後衛まで敵を通さなかった。リズ先輩は前で乱戦になってたのに正確に弓を当てていたし、何より先輩の魔法、カツコ良かったし、なんか美しいって感じだったしなあ」

「そ、そう？なんかそこまで褒められると恥ずかしいわね……」

なんか興奮のあまりものすごいこと言った気がするけど、概ね本心のはず。ほんとにカツコ良かったし、尊敬すべき先輩方だと思う。だが、とりわけ惹かれたのは似たようなスタイルの団長でも、がっちり守れるルシアン先輩でも、先程助けてもらったリズ先輩でもなくクリス先輩だったのだ。

というか、どっちかっていうと冒険者としてだけじゃなく、女の人としても惹かれてるかもしれない。ぶっちゃけ好みのタイプのタイプでもあるしな。

……俺は何を考えているんだ!?ちよつと興奮しすぎかもしれないぞ、これは

……。

アホなこと考えてたせいでなんか恥ずかしくなってきた俺は、魔石回収の手伝いついでにこのあとの予定を聞くべく、団長たちの方に向かう。やっぱりしばらくはサポーターやった方がいいのかな？

「団長、手伝いますよ」

「おお、助かるぜ」

「これからどうします？戻りますか？」

「そうだな。お互いの実力も知れたことだし、こんだけやれば赤字にはならんだろ。一旦帰るか……それでいいか？」

団長が、俺たちと同じように魔石の回収をしていたルシアン先輩とリズ先輩にそう呼びかける。返ってきた反応を見るに、彼らはその判断を了承したようだ。

「よし、クリスもそれでいいか？」

「ええ、構わないわ」

「じゃあ、全員、帰還するぞ！」

団長の号令を聞き流しながら、俺は今後の身の振り方を考えていたのだった。

「ところで新人よ」

「何か用？リズ先輩」

「いやな、お前の名前、長くて言いにくいのだが、なんか愛称とかなかったのか？」

帰途に着く中、リズ・アードはファミリアの新人であるアイザック・ハーケンにそう問いかける。彼女がアイザックのことを「新人」と呼ぶのは、名前を覚えていないのではなく一重に彼の名前が長い——少なくとも彼女はそう感じた——からであったのだ。

「いや、特にそういうのはなかったかな」

「そうかあ、ないか……。ではザックとか、どうだ？」

「ザックですか……まあ、先輩が考えてくれた愛称だし、ありがたく頂戴するよ」

アイザックにとってその響きはお荷物ナップザックを連想させる言葉であった。だが、彼は「他人に愛称をつけられる」ということを嬉しく感じたのだ。故に、少々の考え過ぎはなかったことにしてその名を受け入れる。

「よし！であるなら、我輩はこれからお前をザックと呼ぶぞ。他の者にも伝えるか？」  
「ああ、わかった先輩、頼むよ」

アイザック改めザックとリズ、さらにその家族なかまたちは、各々の喜びとともに彼らのホームにも帰る。次の日もまた同じように全員で帰ることを願いながら。